



地御前神社の御陵衣祭は、旧暦の5月5日端午の節句に執り行われます。昭和年代終わりころまで、巖島神社から神馬を船に乗せて神職と共に渡ってこられた。

祭典は、先ず神饌や祭典に奉仕する神職及び参拝者を祓い清める「修祓」^{しゅぼつ}に始まります。次に齋主並びに祭員は客人社に進み着座します。これより客人社における祭典が開始され、神前にお供物を奉獻する「献饌」^{けんせん}（この間奏楽）齋主祝詞奏上、齋主玉串奉奠^{ほうてん}、神前のお供物を撤下する「撤饌」^{せつせん}（この間奏楽）の次第で執行されます。続いて齋主並びに祭員は大宮社に進み着座します。これより大宮社における祭典が開催されます。次第は客人社と同じですが、齋主玉串奉奠に続き地元の代表者や、初節句の男児が玉串を奉奠します。

祭典終了後、舞楽が二曲奉奏されます。一曲目は「蘭陵王」です。別名「陵王」とも称されます。中国六朝時代の北斎国王蘭陵王長恭は周の大軍と戦い大勝を納め、勇名を天下に轟かせました。その武勲を賞賛し、その勇壮な様を模して造られたと伝えられています。舞人は竜頭を頂いた面を被り、赤色の裃襦装束^{りょうとう}を着け、一尺程の金色の桴^{ぼち}を持って舞います。舞振りは頗る迅速軽妙です。

二曲目は「納曾利」です。この舞は「蘭陵王」の答舞で雌雄の龍が昇天する姿を模したと言われています。二人舞と一人舞があり御陵衣祭は一人舞です。舞人は萌黄色の裃襦装束^{もえぎ}を着け、一尺程の銀色の桴を持って舞います。舞振りは活気があって頗る面白く、手振り足使いは大変巧妙です。なお、舞楽の曲目は一定ではなく、数年前には「納曾利」に替えて「還城楽」^{げんじょう}が奉奏されました。また雅楽・舞楽の演奏には鞀鼓^{かっこ}（献饌、撤饌、蘭陵王）三鼓^{さんのかづみ}（納曾利）、太鼓、鉦鼓、笙^{ひちりき}（献饌、撤饌、蘭陵王）箏^{りゅうてき}、龍笛^{りゅうてき}（献饌、撤饌、蘭陵王）、高麗笛^{こまぶえ}（納曾利）が用いられます。

御陵衣祭の祭典開始前には、神馬に飾りつけを施し、お供の人も白張を着け、神職の御祓いを受けた後、獅子頭に先頭にされ、地御前の町内を巡行します。

*天保年間時代(1839)頃は

5月3日 巖島より神職渡海の後、お供・祝詞・上郷柗舞・人長の舞・東游神興お旅所へ。神馬お渡りの儀。

5月4日 お旅所で奏楽。獅子舞。

5月5日 お旅所より還御。還御後、流鏝馬。舞楽、陵王・納會利。

天保年間は、3日間外宮地御前神社で祭典が執り行われました。



御陵衣祭

流鏝馬神事

流鏝馬、地元の人々は「馬飛ばし」が愛称になって親しみを感じる地御前村の祭りの一つで、親戚や友達が集まって賑わったものです。

流鏝馬は、中世期に武士が狩りに出かけるときは、狩り装束に身を包み、騎手が馬を走らせながら矢を射る技術が要求され、馬術と弓術を一体として会得する訓練方法の一つにしたのが流鏝馬の始まりである。鎌倉幕府を開いた源頼朝が文治3年(1187)に流鏝馬神事を始めたとも言われる。

地御前村の流鏝馬神事は、豊臣秀頼の時代に、安芸の国の藩主安芸の守が奉納馬を仕立てて参拝したのが始まりで、流鏝馬神事が始まって以来400年以上の歴史がある。



流鏝馬神事(その昔)

また藤原親実が巖島神社の神主の職に任命されて、親実が桜尾城主に移住したことから、鎌倉時代の武芸の一環として、流鏝馬神事が導入されたともいわれる。慶長3年(1598)には馬が3頭で、明和7年(1770)2頭になり、文

政2年(1819)には1頭になった。元禄15年(1702)頃は、馬が3頭で、観衆が竿竹をもって馬を海辺に追いやり海に近いところを走らすと、今年は豊作と言われた。

地御前の流鏝馬も、昭和42年頃(1967)から農家の時代変革により馬や牛を飼わなくなり一時中断した時期がありましたが、地域の方からの強い要望で、昭和57年に再度復活することが出来ました。流鏝馬は、色々な地域で開催されており、他の地域では馬を走らせ騎手が弓矢を射ております。地御前は、昭和40年ごろまで弓矢は射ないが、地御前街道を3回走っていました。第1回は、両手綱を持って走り、2回目は片手綱で走り、3回目に両手綱を放して走り、観衆が青竹竿で馬を叩くので馬主は馬が傷つくので馬を出さなくなったとも言われています。また、参道が都市化によるアスファルト舗装により馬が走れなくなったとも言われています。

現在では、騎手が馬上より3か所の的に弓矢を射て、馬主が手綱をとって歩く形をとっている。現在の装束は、平成17年と18年に新調されたもので、以前の衣装は、慶長元年と衣装ケースに書かれている。



流鏝馬神事1

駄洒落

端午の節句は、菖蒲とヨモギを束ね軒に揚げ祝ったことから「菖蒲」の節句。また、菖蒲が「勝負・尚武」の節句と洒落によるもの。節句の夜は菖蒲を風呂に入れ薬湯にしたことから「薬味」の節句ともいわれます。



儀の射馬鎊流

神馬巡行の儀

^{しんめ}神馬（白馬）は、昭和 30 年代までは、巖島神社回廊の入り口の神馬舎で飼われていた。参拝者が餌を与える前に、「おまわり」と言うと、馬舎の中を一廻りする賢い神馬であった。神馬は栗毛であっても神社で飼われると、白馬になると言われ、宮島の七不思議の一つである。御陵衣祭（旧暦の 5 月 5 日）には、神馬と巖島神社の神職がそれぞれ船に乗り地御前神社にわたって来られていた。

御陵衣祭の祭典が始まる前、神馬には衣装をつけ背鞍に^{しもろぎ}神籬を立て、たてがみと尾に紙垂^{しで}を着ける。そして神職のお祓いの後、獅子頭を先頭に付き人に引かれて、地御前地区を巡行する。

現在神馬の役を担うのは近隣の県（岡山県、山口県）で飼われている馬である。



神馬お渡の儀



神馬お渡の儀

有府水門(有府の港)

明治時代前期まで、地御前神社前は海で有府水門は有府の港・御鏡の池ともいわれた。水門は、佐馬場谷から流れ出す田屋川と、木上谷から流れる平原川の合流地点に、海水を堰き止めるための樋門があった。

旧暦 6 月 17 日、管絃祭で海が荒れ波が高いとき、御座船を一時避難させ、渡御の神輿を外宮地御前神社に奉還して、管絃船をこの入り江に係留して波が治まるまで待つ港。神輿を御座船に乗せるようになったのは、明治 14 年(1881)で、神主が笛・太鼓・鉦鼓など、御座船で奏でられるようになった。

川を有府川と言ひ、有府川に架けられた赤い橋を外宮橋と言う。この橋は明治 13 年(1880)に往還道が出来た時に作られた。大正 15 年(1926)に電車が走るようになり、昭和 7 年(1932)に観光道路ができ、港として利用できないが、昭和 22~23 年頃の夏には、貸ボートに係留されていた。



旧 有府の港

お洲掘り

期日は、旧暦の6月15日

地御前神社前の、明神が浜の御池で御座船を迎えるための行事で、地御前村・宮内村・平良村・佐方村の各村が奉仕していました。当日は、引き潮に合わせてミヨギ（御座船が入る印柱。^{みよぎ} 濔木と表記し、読みはミオギが正しいと思われ
ますが、地元ではミヨギと発音されます）の内側の洲を掘り、終る頃、牛に漆塗りの鞍をつけ、各家々の家紋の入った幟を立てる。10数頭の牛が先牛に従って、鮮やかな手さばきにより、馬鍬^{まぐわ}をつけて代掻き^{しろか}のように引きます。舞進するさまは観衆を楽しませてくれる場面です。そして御池の沖側に、高さ10mのミヨギを両側に立てます。管絃祭の当日には、巖島神社の御社紋（^{けんはなびしみつ} 剣花菱三
^{きっこう} 亀甲 --- 三つ団子）の入った印の大提灯をミヨギに吊るします。

お洲掘りが終わると、地御前神社前に、奉仕者や牛が御神酒をいただいて行事が終了します。

昭和20年代まで行われてきたが、現在は見ることはできません。

なお、ミヨギたては、現在地御前漁港の人達が御奉仕されています。

巖島神社のお洲掘りは、旧暦の6月11日に行われる。



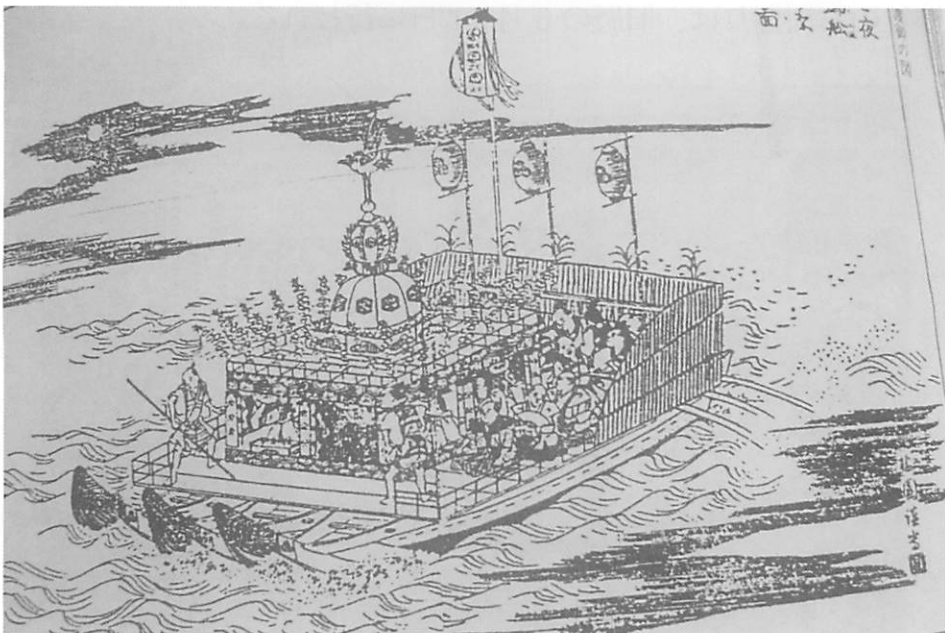
御洲掘り(その昔)

管絃祭

管絃祭は、旧暦の6月17日で地元では、「十七夜」とか「おかげんさん」と言われ地元のお祭りとして、古くから親しまれてきたお祭り。

管絃とは、龍笛・太鼓・笙^{しょう}・篳篥^{ひちりき}・鉦鼓^{しょうこ}などで合奏する大陸から伝わった音楽です。

管絃祭は、平清盛公が現在の厳島神社を造営されてから始められたという伝説がある。その時代、宮島には住民が住んでいなかったので、対岸の地御前神社から船を浮かべて、長浜神社や大元神社を経て御本社厳島神社で、管絃を奏でたのが始まり。永暦元年(1160)に平清盛が初めて厳島神社に参詣して、宮島に住民が住むようになって厳島神社から管絃船が出るようになった。御座船は、今は3隻並べて組んでいるが、その前は、大きい御座船が1隻で、櫓が6挺あったが、元禄3年(1690)からこぎ船が曳くようになった。こぎ船は、江波(櫓)12挺に阿賀(櫓)6挺が引き船になり、船の御前で子供が法被に鉢巻き姿で太鼓に合わせて船頭の木遣り音頭を踊る。水先案内は、地御前の三つ団子(厳島神社の社紋)を乗せた船。



管絃祭絵図

神事は、午後より巖島神社で祭典があり御鳳輦ごほうれんを御座船に乗せ（御鳳輦は明治14年(1881)から乗せるようになった）出発前江波の漕ぎ船が、神社の枡形を3周まわり御座船を曳いて阿賀船と地御前の対岸火立岩に向かう。火立岩沖に停泊して潮時をみはからって、御座船の提灯に燈明を入れ松明を焚く。江波の漕ぎ船のみ先行して、地御前神社拝殿前で木遣り音頭「きそいえ踊り」かい「權踊り」を踊る。明治14年から、能美島（高田）の船が御座船の後ろで、お供え船として従い、ぼんぼりに明かりをともした頃、地御前から村長はじめ村の関係者を乗せた水先案内船が御座船に向い、御座船は水先案内に従い御池に進む。管絃船では献饌・祝詞奏上けんせんの後管絃が始まる。まず、「三臺塩」さんだいえん「五常楽」が奏でられ、御座船が御池を3周する間ほいろ「陪臚」を奏で長浜神社に向かう。



管絃祭

地御前の町屋

地御前の町屋風の建築物が段々と数が少なくなってきている。最近では、町屋建築がリホームされ、画影が多少異なってきている。町屋は屋根の低い二階に厨子（ズシ）が設けられ、軒裏や垂木の柱及び窓の格子など外部に露出する木部を漆喰で（シッコイ）塗り込んでいる。軒下に設けてある袖壁・出格子・虫籠窓（ムシコ）は、地御前に一軒見られる（佐伯仁邸）。二階部分の壁格子を壁土と漆喰で塗り込めて古い町屋風にとどめている。



町屋 佐伯邸

町屋の一部には、二階部分の窓に木の格子をはめ込んだ格子窓がある。これは、採光をとるためでガラス窓にしたものもある。その他に、横格子の与力窓で格子を「捻り格子」で塗り込めたものもある。袖壁は町屋には設けてあり、軒下の両妻に吐出したものをいう。風切・日返し・目隠し・袖返しなどともいわれるが、屋根面より高く突き出た卯建（ウダチ）とは意味が違う。袖壁には、漆喰で模様を施したものもあり、装飾的な要素を出しているものや、著しく柱のうちに収めた格子や、格子戸を設けたものもある。大戸にはくぐり戸に障子

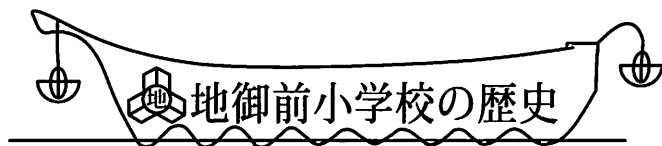
紙が張られたものや、駒寄が取り付けられた家があり（村上清和 邸）、犬走りの部分に木柵を設けて軒下の空間を通りから区切るためである。

忍び返しは、防盜のため、塀の上に立てて並べたもので、割竹の先を尖らせた忍び返しが見られる。

雨よけには、妻側の出っ張りが少ないので、雨の害から建物を守るために妻側の壁面に張りつけたもので、板を縦に張った羽目板張り、横に張った下見張りがある。



町屋 村上邸

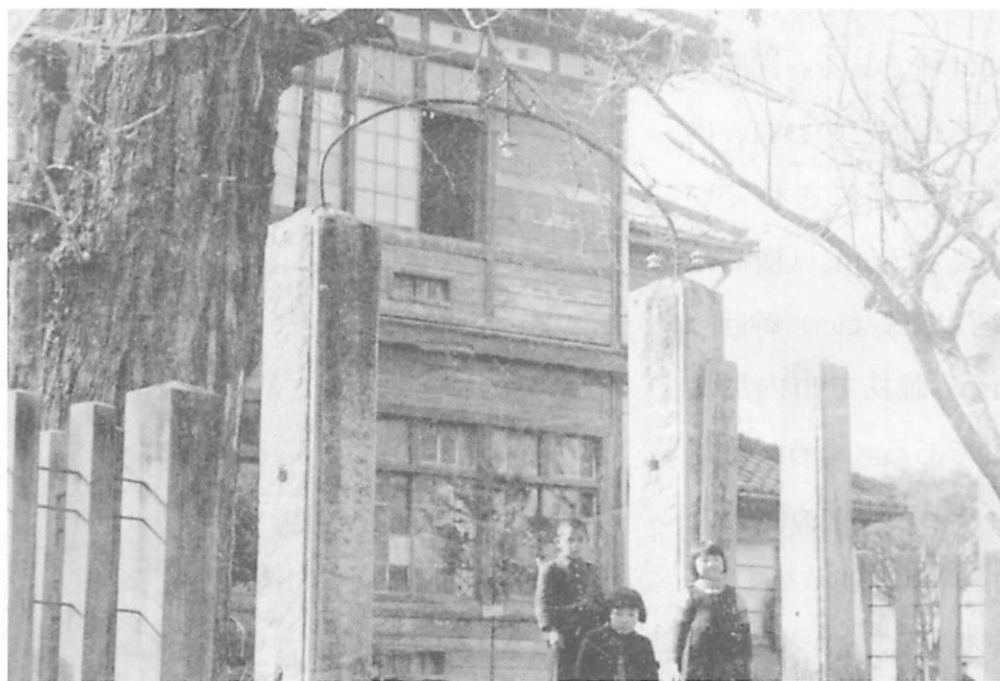


明治 6 年」(1873) 4 月 5 日地御前小学校のまえ、必燐舎の名前で釈迦堂を
教場として、教師 3 名 松野了明・板垣実明・松野香巖いずれもお寺の住職で
開校された。

当時の月謝 68 銭 2 厘・1 年 20 円 18 銭 4 厘

- 明治 9 年(1876) 4 月 1 日 地御前小学校設立
- 明治 17 年(1884) 8 月 二階建て校舎新築
- 明治 19 年(1886) 4 月 1 日 地御前村簡易科小学校に改名
- 明治 24 年(1891) 4 月 1 日 地御前村尋常小学校に改名
- 明治 38 年(1905) 4 月 1 日 地御前尋常高等小学校に改名
- 大正 12 年(1923) 4 月 30 日 校舎の改築落成
- 昭和 16 年(1941) 4 月 1 日 地御前村国民学校に改名
- 昭和 20 年(1945) 8 月 6 日 原爆被災者救援所
- 昭和 22 年(1947) 4 月 1 日 地御前村小学校に改名
地御前村中学校開設 24 年まで
- 昭和 23 年(1948) 3 月 1 日 ミルク給食始まる
- 昭和 27 年(1952) 5 月 3 日 昭和 26 年大歳神社の社殿の地を一段削り落と
しその砂を小林千古の生誕の地に埋め立て、そ
こに講堂が設立された
- 昭和 30 年(1955) 6 月 4 日 木造二階建て校舎落成 (前側)
- 昭和 31 年(1956) 9 月 30 日 町村合併により廿日市町立地御前小学校と改称
- 昭和 39 年(1964) 5 月 11 日 管理棟第 1 期工事完了
- 昭和 39 年(1964)10 月 10 日 全教室に白黒テレビ設置
- 昭和 41 年(1966) 3 月 30 日 管理棟第 2 期工事完了
- 昭和 45 年(1970) 7 月 29 日 プール完成 鹿ノ子町
- 昭和 48 年(1973)11 月 25 日 カラーテレビ全教室設置

昭和 49 年 (1974)	6 月 3 日	新校舎 3 階建て落成
昭和 54 年 (1979)	6 月 30 日	屋内体育館完成
昭和 61 年 (1986)	9 月 16 日	管理特別教室棟改修工事完了
昭和 62 年 (1987)	9 月 1 日	正門改修工事完了
平成 元年 (1989)	8 月 17 日	校庭西側防球ネット取り付け
平成 元年 (1989)	10 月 26 日	アスレチック撤去
平成 2 年 (1990)	3 月 30 日	全教室テレビ取り替え
平成 3 年 (1991)	3 月 31 日	運動場改修工事完了
平成 18 年 (2006)	7 月 19 日	校庭を掘り下げ遺跡発掘調査
平成 19 年 (2007)	3 月	教室棟耐震改修工事完了
平成 20 年 (2008)	3 月	管理棟新築
平成 21 年 (2009)	3 月	体育館耐震工事完了
平成 22 年 (2010)	3 月	プール新築

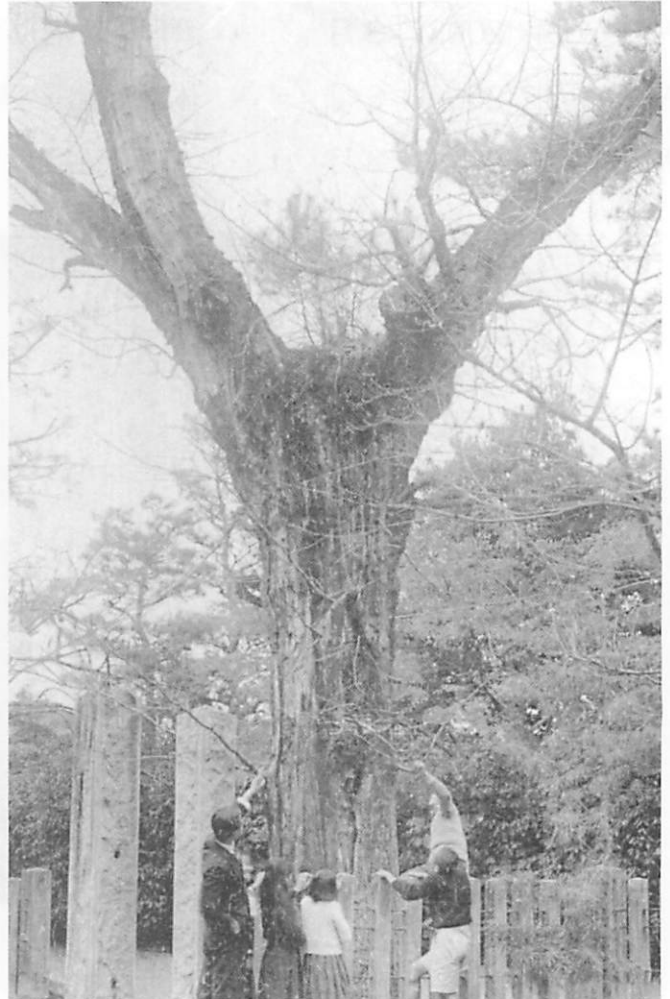


地御前小学校

大イチョウ

仁安 3 年 (1168) 頃地御前小学校の敷地は、神仏習合の時代で多くの神社仏閣が建立されており、その時代から大イチョウは樹立しておりました。現在は、小学校正門の横に樹立している。大イチョウはソテツと同じ原始的な裸子植物で動く精子を持っており、中国の原産といわれ日本には自生していない。大イチョウは、裸子植物銀杏科に属する中国原産の落葉樹の高木であり、秋の黄色葉が美しく、雌・雄の異株で春に開花し、雄花から飛んだ穂状の花粉は、二股に分かれて目立たないように雌花に到達するが、受精は 10 月で種子が成熟する直前おこなわれ、この時

に、精子が形成される。イチョウの種子は、熟すると黄色になり臭気がある一見果実のようであるが、植物学的には種である。肉腫皮は堅くて銀杏といわれ、内部の種が食用にされている。樹高 15,5m、(樹高は定かではではない) 幹回り 3,18m の雌株で市内最大のものである。もう一本雌株のイチョウの木があったが、大正時代校舎改築の際、伐採された。



大イチョウ



地御前公民館の始まりは、大歳神社を一段下げた時の砂を、小学校校庭に埋めて、昭和 27 年 (1952) に地御前小学校講堂兼公民館として新築され、20 年余り、いろいろな行事の場所として、また青年団の活動拠点として、その役割を果たしてきました。昭和 48 年 (1973) に元地御前村村役場の跡地に、鉄筋 3 階建ての公民館が竣工(一部子供相談室)。その後 20 年間、日常生活に密着した、楽しい学習の場や各種活動の場、公共性を持った地域住民のサロンの場所として利用され、地域住民の文化を高め社会福祉に努めてきた。特に、昭和 52 年 (1977) に広島は、県政の重点施策として、コミュニティを立ち上げるべく、県内 6 地区に推進地区を指定してきましたが、地御前地区がその一つとして選ばれ、コミュニティづくりの実践活動を支える役割を担ってきました。そして現在の市民センターは、平成 5 年 (1993) 4 月前公民館以東に、元相良味噌・醤油店跡地に新築されました。鉄筋 2 階建て、室数は、事務室・図書室を含め 10 室。活動は、生涯学習の場として、地域の方々に愛され、自主活動 (クラブ) 等、利用者は高齢者が多いのですが、明るく生き生きとしている。



地御前公民館の前身 村役場



金剛寺の建立は、正安 2 年 (1300) 頃であり、巖島神社の神主で桜尾城主藤原家 5 代目藤原親実は「金剛寺入道」と号した。

芸藩通誌には、元禄 7 年 (1694) 金剛寺新開が造成された記事はあるが、地図には金剛寺跡だけである。

扇新開が造成される以前文政 3 年 (1820) 頃、二つ山が海岸に迫り、山肌が海側にそそり立って、他の地域の土質より堅い岩盤なので金剛寺と名称がつけられたとの説もある。また、宗教的にも金剛寺が廃寺後も、金剛寺の名称が強く地御前の大字名として残っている。

御手洗川のいわれは、神武天皇が東征の際、この地に立ち寄って手を洗われたので、この名が付いたのだと言われています。その際、地御前ハイツ（金剛寺小学校）付近の、山の木の枝に衣をお掛けになられたので、その山を御衣尾^{みそのお}山と呼ぶとのこと。

御手洗という名が付いた地名は沢山あります。宮島の神社回廊裏を流れる御手洗川は、地御前から神主が舟で宮島に渡り、神社の前で手を洗い清めて神社に入ったからだそうです。しかし宮島の御手洗川は、現在の神社回廊の出口のところに流れており、神主は手を洗い清めてどこから入られたのか？宮島は神の島で人は住んでいませんでした。住むようになったのは鎌倉時代からで、住む場所としては、現在の回廊の出口の方であったといわれており、その当時神社回廊入口は、現在の出口の方であったと言われております。神社の玄関付近に人が住んでいては！ということで現在のすがたになったといわれております。これで神主が神社の前の川で手を洗い清められたことも理解できます。その他にも、江戸時代に潮待ち港として賑わった大崎下島の豊町の御手洗。山口県光市の室積港を囲む御手洗港があり、神功皇后が立ち寄った際に手を洗ったからだといわれております。



二つ山の頂上から地御前村の町が一望でき、正面の扇形に見えるのが扇園で、二つ山の下が、扇の要で「要町」の地名と言われている。二つ山の西側の地質は、他の地域より硬い岩盤（花崗岩質）であるため、地御前往還道が出来る前まで、文政年間（1820）頃は、二つ山が海岸に迫り出し、地御前村を東西に二分された形になっていた。よって、干潮時のみしか通行できなかったもので、普段は、賽の峠を通行していた。昭和 15～16 年頃まで岩風呂（伏田家）が開業されていた。また、昭和 25 年（1950）頃まで秋祭りの御神幸御旅所祭があったが、神輿を担いで、石段の上り下りが大変難儀をした。現在は、今市稲荷神社にて執り行われる。



二つ山

戦没者慰霊碑

金剛寺の新墓地に戦没者慰霊碑がある。その慰霊碑は昭和 41 年 3 月 (1966) に地御前地区遺族会が主体で地区有志の方々の努力で立派な慰霊碑が建立されました。慰霊碑の建設委員長は勝谷 廉氏。

慰霊碑の石は、のうが高原より運ばれ、石碑の書は、元衆議院議長の灘尾 弘吉氏です。

石工は奥野得三 (港町)・庭園は川本兵一 (鹿ノ子)・工建は品川照吉 (港町)、以上地元の職人が関わっておられる。

慰霊碑には、支那事変並びに第 2 次大戦における地御前・阿品・阿品台の戦没者及び原爆で亡くなられた学徒動員の犠牲者 206 柱が合祀されています。

毎年 8 月 13 日午後 6 時より慰霊碑前にて西向寺・正行寺導師のもと勤行で慰霊祭を盛大に行っています。



慰霊碑

賽の神とハゼの木

さい
賽とは、関所のことで他村から入る疫病や悪霊を監視する神様と言われていた。明治初期頃まで沿岸部の道路は、潮が満潮の時は通行できないため、「さいの峠」を利用していた。最近では、さいの峠を道祖神と呼ばれ手を合わせて通る人がいるとか？いつの日か、お正月にはしめ縄が、お盆には盆灯籠が供えられたことがあり、神仏習合の場所となっている。

伝説として、昔、有名な和尚さんが「さいの峠」で休んでいると、通行人にたびたび道を尋ねられるので、道標にハゼの木を植えて麓から石を持って来て、石碑を建てたといわれている。

「ハゼの木」はウルシ科で落葉樹、樹高 6,5m 幹回り 3,5m ハゼの木にキズタが巻き付き美しい調和を見せていたが、平成 4 年の台風によりハゼの木が半分割れ倒れる。

賽の神の場所は、金剛寺小学校グラウンド横です。

ハゼの木とキズタの木は、廿日市市指定文化財に指定された。

取得 昭和 60 年 7 月 12 日



ハゼの木

一里標と国道開墾碑

江戸時代の西国街道は、宮内村と大野村の境の四朗峠、大野村の四十八坂、玖波村の馬ためし、小方村の飛び石の窪、大竹村の苦の坂の難所越えの道のりのため、新しく往還道（新国道）が造られることになり、新国道は、海岸沿いに地御前の御手洗橋から大竹村の栄橋まで造られた。工事は、明治7年（1874）に広島元安川から廿日市まで、明治10年（1877）に廿日市から地御前まで、明治13年（1880）地御前から大竹栄橋まで。地御前の一里標は、広島市の元安川を起点に一里ごとに建てられたもので、また、地御前公民館の三差路に、「右広島道」と案内道しるべが、明治9年に建てられている。西国街道の一里塚跡の碑は、宮内の専念寺前に建立されている。また、道路の新設や改修にともなう、馬車交通に対応するための橋の架設が盛んにおこなわれた。



一里塚

新国道の完成記念として、地御前神社東側に、国道開墾碑が明治 20 年 (1887) に建立され、工事に携わった 510 名の氏名が碑の裏側に刻まれている。石碑の上に「地平天成」と刻まれ、この書は、有栖川宮殿下の書で（地平線はどこまでも天とつながる）の意味で、また、年号「平成」の出典の一部である。宮島観光道路は、昭和 6 年 (1931) に折からの昭和恐慌下で、激増した失業対策として国道改良工事が行われることになり、宮島観光道路は、その年の、4 月から着工されることになった。宮島観光道路は、昭和 8 年 (1933) に国道 2 号線に改称される。コンクリート舗装は昭和 9 年。また、西広島バイパスは、昭和 49 年完成。



国道開墾碑



盃状穴

地御前小学校の石垣で大歳神社寄りの角に、大型たこ焼きを作るのに丁度よい石垣が一つある。盃状穴石である。日本でも古くから石に対する信仰は存在していた。日本の盃状石は縄文時代から作られ、元々は磐座に彫られ、子孫繁栄や死者の蘇生を願ったものとされる。古墳時代までの日本の古墳にある石棺蓋石からも発見される。(径 3~10 cm程度の穴で盃状)

福岡県飯盛神社に盃状穴石の説明板があり、「古墳の蓋石」に使われていたのではと書いてありますが、地御前にははっきりとした資料は現在ありません。



盃状穴